序章

1. はじめに

ロシアの18世紀は、啓蒙の世紀と呼ばれる。18世紀後半、ロシアの近代化を目指していたエカテリーナⅡ世（1729-96 在位 1762-96）は国家統治にあたり、重要な原則として、1）統治すべき国家を啓蒙すること、2）国家に良き秩序を確立し、社会を維持し、法が遵守される社会にすること、3）国家に良き正しきポリツァイ/ポリス（полиция）[1]を整備すること、4）国家の繁栄を促進し、国家を豊かにすること、5）国家そのものを周囲が恐れる国家にし、隣国に尊敬の念をおこさせること、市民（гражданин）を神・皇帝・社会に対して自らの義務を認識するように教育することを掲げた[2]。そして、これらの統治原則は、政治・経済・文化において政策として実行される。

エカテリーナⅡ世は、ロシアの西欧化を実現するために、啓蒙活動を展開した。18世紀後半における貴族文化人による文化啓蒙活動の集大成である『ロシア・アカデミー辞典』[3]では、「啓蒙」を表すロシア語の «просвещение» の意味は、1）照らすこと、2）教導すること：偽の、非難に値する概念や結論を理性から一掃し、無知蒙昧に対抗すること、3）教会用語で神現祭を表すと記されている。この第2の意味を実施するために、積極的に採用された方策が出版活動による読書の普及である。

18世紀後半においては読書や書籍の普及により、意見を発する「公衆」が生まれる。だが、この時代の「公衆」は特権階級であった貴族から構成されており、社会全体ではなく、発言する機会を持っていた貴族階級が世論の形成の中心であった。

本論文の目的は、18世紀後半に現れた貴族文化人とエカテリーナⅡ世との関係を出版統制政策の観点から考察することである。また、エカテリーナⅡ世がおこなった出版統制政策と貴族文化人の「自己意識」、及び「社会的役割意識」がどのように相互作用していたかという観点から、出版統制政策を分析することである。読書を通じて養われる「自己意識」の問題が、印刷物の発展と密接な関連性を有しているためである。ロシア人文大学の V.I.チューパ教授が「ロシアの貴族文化人においては、貴族としての社会的役割意識が個人の自己意識よりも強く見られる」[4]と主張しているように、この貴族文化人に特徴的な「自己意識」と「社会的役割意識」は、出版活動と文芸活動に現れている。これらを総合的に考察することによって 18 世紀後半のロシアの貴族社会が置かれた状況や出版活動に伴う文学をとりまく状況が浮かびあがってくると考えられる。

問題意識の根底には、 «censura(1. 監察官の職務、2. 財産・身分の査定、審査、評価 3. 風紀取締監察)» 、 « censor(戸口調査官、風紀取締官、監察官)»[5]と説明されているラテン語起源のロシア語の言葉«цензура»と «цензор»が意味する内容がある。これらの言葉は、現在ではそれぞれ「検閲」、「検閲官」と訳されるが、18世紀後半にはこれらの言葉が何を意味していたかについても、重要な考察対象とした。

2. 各章の内容と先行研究

本論文は、序章と終章を含めて、全部で7章から構成されている。18世紀後半から末にかけて、エカテリーナⅡ世の積極的な啓蒙政策や出版産業の進展により、ロシアでは「読者層」と呼ばれる

「教養層」が現れている。それは、啓蒙が浸透するにつれて熱心に読書に親しみ、書籍を必要とした「読者層」が拡大した結果である。

文化史家のYu.M.ロートマン(1922-93) は、論文「18 世紀から 19 世紀初頭にかけてのロシア文化史概観」の「文学と読書：書籍に関する生活」において、「文学の役割の評価は文学に対する読者の立場を研究することなくしてはおこなうことはできない」[6]と指摘した。さらに「ロシア貴族の文化生活の観点から、貴族の世界観の形成に読書が極めて重要な役割を果たした」[7]と述べ、18 世紀における文学と書籍と読者の関係の重要性と「読者層」を研究することが不可欠だと主張している。

一方、2001 年にA.I.レイトブラトは、プーシキン時代の書籍文化に関する歴史社会的概観と言う副題で『いかにしてプーシキンは天才となったか』[8]を出版している。この著作は A.S.プーシキン(1799-1837)の時代が中心とはなっているが、18 世紀末からの読者層の形成やその時代の文学と読書の問題について触れている。プーシキン以前の時代について、「文学は独立して存在しておらず、宮廷や庇護者や学術機関に属していて、文学は職務であった」と位置づけ、「そのため文学は、権力者や高官を賛美する目的や教育のために利用された」と指摘している。また「当時職業人としての作家はいなかったし、読者たる公衆（читательская публика）もいなかった」[9]ともレイトブラトは主張する。18 世紀末、ロシアには本当に「読書たる公衆」は、存在しなかったのだろうか。

本論文の第Ⅰ章では、18 世紀後半の「読者たる公衆」がつくりあげた「社会（общество）」が特権階級である貴族により構成されていたことを明らかにするために、これまでの先行研究を基礎に「読者層」を分析する。18 世紀後半のロシア読者層に関する包括的研究はない。だが、ロシアの「読書層」に関しては、V.B.サプノフが 1978 年に読者層を識字率の問題から論じた論文「封建時代におけるロシア読者の歴史」[10]を発表、続いてA.N.セヴァスチヤノフが 1983 年に論文「ロシアにおける書籍雑誌の発展ファクターとしての教養層の増加」[11]を発表し、「1760 年代に見られた出版活動の急激な進展は、ロシアの教育システムの進展と教養ある人々の数が増えたことと密接に関連している」との意見を主張している。

こういった意見は、A.Yu.サマーリンが定期刊行物と書籍の予約購読者リストを基礎に、統計学的分析を用いた研究書『18 世紀後半のロシアにおける読者』[12]において、読者層を分析した結果から間接的にではあるが証明される。そして、18 世紀後半から末にかけての書籍・雑誌などの購読者の大半が貴族層であること、教育を受けた雑階級や商人なども読書層だったことから明らかになった。

これらの先行研究から、読者層の拡大は啓蒙活動の進展により教育機会が増えたことによる識字率の上昇と深く関連していることが明確になった。さらに、読者層の大部分を占めていた貴族層に新たに女性層や非貴族階級の雑階級や商人などが加わり、それが読者層を拡大させ、ロシアの出版産業を大きく進展させたことが明らかになっている。

出版業の発展は、ジャーナリズムの出現と関連している。教養文化人が中心となり、定期刊行物などを出版し、作品や意見を雑誌などに掲載することにより、印刷物という公の場で社会問題や政治問題を討議する場所を公衆に提供したからである。

本論文では、18 世紀後半に現れた西欧文化を受容した教養ある貴族を「貴族文化人」と名づけている。読者の拡大は貴族文化人の出版活動と文芸活動に密接な関係があるため、貴族文化人の構成も重要である。そして、非貴族階級出身者が教育を受け、官位を得て貴族文化人として活躍したこと、啓蒙・教育活動の成果の象徴として非貴族階級出身者の貴族文化人がいたことについて分析を

おこなっている。

貴族文化人については、M.M.シトランゲが1956年に発表し、フランス革命がロシア社会に与えた影響について詳しく記した『ロシア社会とフランス革命』[13]、同じくシトランゲが1965年に発表した『18 世紀ロシアの民主主義的インテリゲンツィア』[14]などで、雑階級や商人出身の文化人の登場と形成について詳しく検討している。18世紀末に貴族階級以外の文化人がいかに多く現れたかについて、シトランゲは具体的に名前を記して説明を加え、読書の拡大と外国の影響力の増大が文化人を育てたとの意見を述べている。ただし、これらの著作はソビエト連邦時代に書かれたため、非貴族階級出身の文化人が後に官位を得て貴族になったことについては触れていない。

また、第1章では18世紀後半のロシア社会において、貴族文化人が活動をおこなった場所についても考察する。活動場所として、貴族の知的精神面の発展において多大な役割を果たした存在として、フリーメーソンについて若干触れている。フリーメーソンに関しては、1916年に発表されたA.N.プィピン(1833-1904)の『18世紀、19世紀4分の1世紀にみるロシアのフリーメーソン』[15]、及び1917年刊行のG.V.ヴェルナツキー(1888-1973)の『エカテリーナⅡ世治下ロシアのフリーメーソン』[16] を参考にしている。最近の研究としては、1999年に発表されたD.スミスの『Freemasonry and the Public in Eighteenth century Russia・Imperial Russia』[17]がある。スミスがフリーメーソンを 18 世紀後半に登場した「公衆」との問題に関連させ、考察している点は興味深い。貴族文化人にとってフリーメーソンのロッジは、意見を交換したり、新しい作品を発表したりする文芸サロンや各種クラブと同じような社交場の役割も果たしていたのである。

「読者」「公衆」「世論」は定期刊行物や書籍の出版と関連しており、ロシアにおけるジャーナリズムの進展を示している。そのためジャーナリズム史を概観する意味で考察したのは、18世紀文化研究者のP.N.ベルコフ（1896-1969）が1952年に出版した『18世紀のロシアジャーナリズム史』[18]である。ベルコフは、ロシアのジャーナリズムの発展史を詳しく分析し、「18世紀後半のロシアの定期刊行物の読者層の研究は、ロシアの定期刊行物がその時代の社会意識にどのくらい影響を与えたかを知る上で重要なことである」[19]と記している。ベルコフも、ロシアの 18 世紀の出版文化活動をロシアの読者層の観点から分析することが肝要であると指摘している。

そして、とくに出版統制政策と重要な関わりをもち、出版者、編集者、著作家として活躍した貴族文化人に注目した。作家N.M.カラムジン(1766-1826)までの 18 世紀ロシア文学の概観を記した『近代ロシア文学の原点ニコライ・カラムジン研究』[20]の中で藤沼貴は「1785年から1800年までの文学の特徴として、文学が私的発言になったこと」をあげ、その理由として「文学が国家の文化事業でなくなったこと、文学に新しいヒーローが登場したこと、民族性が意識されるようになったことなどの現象が発露してきたこと」[21]を指摘する。これらの特徴は、エカテリーナⅡ世の出版統制政策の変遷に如実に反映されていると考える。文学作品で私的な発言が見られるようになったことは、貴族文化人が持ち合わせた「自己意識」と貴族としての「社会的役割意識」と関連していると考える。「自己意識」と「社会的役割意識」があいまって、文化人は政治・社会問題に関する自らの意見を風刺という形で印刷物に発表し、「公衆」に問いかけるようになったためである。

第2章から第5章までは、出版統制関連法令をエカテリーナⅡ世と文化人貴族の関係という観点から見て、3つの時期に区分し、事例を分析する。一次資料として使用したのは、1830年に出版された『ロシア帝国法律大全』[22]、及び18世紀と19世紀に発令された出版統制にかかわる各種の法令をまとめた形で、1862年に国民教育相A.V.ゴロヴニン(1821-86)の命令により編纂された『1720年～1862年までの検閲法令集』[23]である。さらに、2003年に出版された『文書にみるロシアのジ

ャーナリズム：監視の歴史』[24]により、『法律大全』と『検閲法令集』を補足している。

この 2003 年に発行された資料集の名称に、筆者が問題意識として取り扱っているテーマが含まれている。印刷所の設立、印刷物の流通、販売などを含めた営業規制と印刷物の内容介入を意味する内容規制（検閲）を包括した形で、出版統制として取り扱うかの問題である。2003 年に出された資料集は、初めて『監視の歴史』として、内容規制（検閲）の観点からだけでなく、包括的な意味で筆者が使用している用語「出版統制」と同じ立場から法令を収集している。

これまでの先行研究は、内容規制に相当する検閲という観点からのみ書かれているか、もしくは、別個に書籍史、印刷史[25]としておこなわれている。本論文は、この二つの分野を統合して、総合的な出版統制の観点に依拠する。同時に前述のように、18 世紀における «цензура（検閲）»、及び «цензор(検閲官)»の言葉の問題に関して、問題提起している。とくに、1796 年にエカテリーナⅡ世の勅令により、具体的に公式の国家機関としての検閲機関が登場するまでは、これらの言葉は「審査･認可」よりも「批評・校閲」としての意味合いが強かったのではないかと考えた。

検閲分野の先行研究としては、V.A.ザーパドフが 1971 年に発表した論文「18 世紀 60 年代から 90 年代のロシア検閲史概観」[26]がある。ザーパドフは、この論文の冒頭で「今日まで文学研究の中では、18 世紀のロシアの検閲史と書籍出版史の統一見解はなく、またこの時期の検閲史自体もない。革命前までの全ての研究は、『ロシア法律大全』に入っていた若干の勅令の記述にとどまっている。資料が乏しかったため、多くの研究者が、ロシアの検閲の歴史は 1876 年に特別の組織が設立された時から始まっていると考えた」[27]と記している。

V.A.ザーパドフの指摘のように、18 世紀ロシアの検閲史に関する先行研究は少なく、革命前に発表されたものとしては、A.M.スカビチェフスキー（1838-1910）が 1892 年に発表した「ロシア検閲史概観 1700-1863」[28]、1904 年に N.エンゲリガルド(1867-1942)が発表した論文「出版の発展に伴うロシア検閲史」[29]、1909 年に A.コトヴィチが宗教検閲について記した「ロシアにおける宗教検閲（1799-1855）」[30]などである。18 世紀を扱った論文は、1971 年に書かれたザーパドフの前掲の論文、1958 年の D.D.シャムライ「エカテリーナⅡ世時代の検閲史」[31]、1913 年に V.P.セメンニコフが発表した論文「エカテリーナ時代の検閲史によせて」[32]などがある。セメンニコフは、科学アカデミーのアルヒーフに残された資料を調査・分析し、エカテリーナⅡ世が検閲に初めて関心を示したのは 1763 年に外国書籍の輸入制限に関する措置を構築せよという元老院宛ての極秘指令からであるとの意見を出し、初めて 1763 年の極秘指令の存在を知らしめた。

ソ連邦時代には、1940 年にシャムライが論文「陸軍幼年学校印刷所に対する検閲監視」[33]を発表し、続いて 1962 年にはシャムライがベルコフと共に「A.P.スマローコフの『働き蜂』の検閲史について」[34]を発表している。シャムライとベルコフは、エカテリーナⅡ世の治世初期に見られた検閲分野の具体的事例を取り上げ、検閲がどのようにおこなわれていたかを分析している。

これまでの先行研究の中で、1970 年に D.V.チュリチェフが科学アカデミーのアルヒーフに残された資料を基に書いた論文「18 世紀における科学アカデミー出版物の検閲」[35]はとくに評価に値する。科学アカデミーの検閲に関わる具体的事例を取り上げて説明した上で、チュリチェフ自身は、1970 年の時点では総合的な 18 世紀の書籍印刷史も検閲史も存在していないと述べている。この論文の興味深い点は、チュリチェフが 18 世紀の «цензура（検閲»は、 «рецензирование（批評）» であったのではないかと問題提起していることである。

ソ連時代に書かれた論文は、エカテリーナⅡ世が進歩的文化人を育成、庇護したのではなく、進歩的世論を抑えるために検閲を利用したという観点から主として記述されている場合が多い。しか

し、エカテリーナⅡ世は国家の管理から外れた自立的な出版活動に対する警告手段として、外国の影響力がロシア社会に及ぶことを防ぐ手段として出版統制に関連する法律を公布したと考えられる。

1971 年以降も 18 世紀の検閲史については、新しい研究は決して多いとは言えない。1985 年に書籍印刷史の枠内でアメリカの書誌学者 G.マーカーが 18 世紀の検閲について、「民営印刷所の出現と共にロシアに登場し、国家管理をはずれた独自の出版体制の進展にエカテリーナⅡ世らは、的確な対応ができず、しばしば混乱をまねいた」との意見を主張している[36]。この考えは出版統制関連法を時系列的に考察すると、エカテリーナⅡ世、元老院、及び宗務院が常に事件が発生した後に策を講じており、予防・防御策として国の正式の検閲機関が設置されたのが 1796 年である事実からも証明される。しかし、たとえ後手の措置であっても、外国の影響力を阻止するために、段階的に外国書籍の輸入禁止策をとっていることが出版統制関連法から考察される。

近年では、2001 年に発刊された『19 世紀から 20 世紀のロシアにおける検閲史』[37]の中で、G.V.ジルコフが 18 世紀の検閲史を宗教検閲から世俗検閲への移行期として取り扱い、検討している。さらに、2004 年におこなわれた第 7 回 18 世紀ロシア研究会の論文集に G.A.コムソモリンスカヤが「18 世紀モスクワ大学における検閲」[38]、及び O.A.ツァピナが「啓蒙の闘い、1750 年代末から 70 年初頭にかけてのモスクワ大学と宗教検閲」[39]、演劇検閲については S.ブロムが「18 世紀後半における演劇と検閲」[40]をそれぞれ、個別の分野に限定して発表している。いずれの著者も 2004 年の時点でいまだロシアにおける 18 世紀の検閲に関する体系的な著作は存在していないと記している。

2009 年に『啓蒙の世紀　18 世紀フランスとロシアにおける検閲と出版状況』[41]が出版され、「国家検閲の強化」「検閲手段、出版実情、慣例」「検閲官、テクスト、出版者、作家」の 3 つのテーマ別に論文が発表されている。その中でサマーリンが「ロシアにおける出版と検閲の発展（1750 年代～1780 年代）」[42]、V.A.ソモフが「18 世紀末のロシア検閲におけるフランス書籍」[43]の論文を発表している。

このように、ロシア連邦時代になっても 18 世紀の検閲史に関するまとまった研究論文は、発表されていないのが現状である。

18 世紀後半から末にかけてのロシア社会において、内容規制にあたる検閲は外国の影響力を阻止するためにおこなわれている場合が多い。とくにフランス革命以後のロシアにおける出版統制政策は、外国書籍のロシアへの流入を防ぐことが第一の目的となり、その具体的手段としてロシアに初めての公式の検閲機関が設立されている。

本論文では、外国の影響力阻止を目的とした検閲機関の整備と強化の問題が出版統制法とどのように関わっているかという観点から第 5 章を、独立させて論じている。

マーカーは、「ノヴィコフをはじめとするフリーメーソンへの集中攻撃は、モスクワ警視総監を代々務めた Ya.A.ブリュス(1732-91)、P.D.エロプキン(1724-1805)、A.A.プロゾロフスキー(1732-1809)がフリーメーソンを嫌っていたとの理由から、フリーメーソンに関する情報を過度にエカテリーナⅡ世や元老院に送っていたからである」[44]と主張する。同じく、ロシア文学者の M.スローニムも「エカテリーナは急進思想を恐れ、知識人の自由を束縛し、彼らを監視させた。だが、これらの恐怖の念は反動主義者達によって、むやみに過大視され、誇張された感がある」[45]と意見を述べている。

ポリスの幹部は、ノヴィコフら貴族文化人の出版活動を過大視していたのであろうか。果たしてポリスの報告によってエカテリーナⅡ世も恐怖心を抱いたのであろうか。この疑問に答えるため、

ロシア国立古文書館（РГАДА:Российский государственный архив древних актов）の資料[46]を詳細にわたって考察した。アルヒーフの文書には、モスクワやサンクト・ペテルブルグに発禁の外国書籍などが出回っている事実、エカテリーナⅡ世に近い近衛連隊内部にまで外国書籍が流入している事実を記した文書などがあり、どのような対策が具体的にとられたかを示している。また、その後公式の検閲機関の整備に向けて講じられた対策についてもアルヒーフの文書を基礎にして検討した。

これらの文書を探すきっかけとなった文献は、1993 年 5 月から 6 月にかけてロシア帝国とソビエト連邦における検閲システムを公文書館の資料や書籍などを通じて広く知らしめる目的で、モスクワで開催された『ロシア帝国とソビエト連邦における外国書籍検閲に関する展覧会カタログ』[47]である。

第 2 章から第 5 章までの時代区分した出版統制法令に関連して、エカテリーナⅡ世と貴族文化人、中でもエカテリーナⅡ世の急進批判勢力に属する N.I.ノヴィコフ(1744-1818)、A.N.ラジーシチェフ(1749-1802)、穏健批判勢力の D.I.フォンヴィージン(1745-92)の 3 人を取り上げ、両者の関係を出版統制政策の観点からとらえている。この 3 人に共通する特徴は、貴族出身であること、元国家官吏であること、出版活動と文筆活動をおこなっていること、エカテリーナⅡ世とかつて庇護者と被庇護者との関係にあったこと、エカテリーナⅡ世の批判勢力グループに属していることに見られる。また、彼らは作品の中で検閲問題に関する文章を残しており、しかもエカテリーナⅡ世と検閲問題で直接関わりを持った。エカテリーナⅡ世とこの 3 人の貴族文化人との関係を、貴族文化人に特徴的に見られる「自己意識」、及び「社会的役割意識」の観点から分析する。

本論文は、ロシア暦（旧暦）を使用している。新暦に換算するには、旧暦の 1700 年 2 月 19 日から 1800 年 2 月 17 日までは 11 日を、1800 年 2 月 18 年から 1900 年 2 月 28 日までは 12 日を加えればよい。

---

[1] 17 世紀～18 世紀ドイツやフランスの絶対主義国家において統治技術・行政学としてポリツァイ/ポリスが発達していた。ポリツァイ/ポリスは狭義の警察機能のみならず、都市住民の生活一般に対する紀律化を意味する言葉で、「治安」、「救貧」、「衛生」、「教育」、「商取引監視」など広く行政ポリスの意味を持っていたとされる。1768 年にエカテリーナⅡ世が発布した『訓令』の第 21 章で、ポリスとは社会における秩序を維持するために配慮することであると記されている。プガチョフの反乱後にエカテリーナⅡ世がおこなった 1775 年の地方行政改革で各都市のポリスが強化され、1782 年のポリス規約によりポリスが都市生活の紀律化において重要な役割を果たすことが特定された。ポリツァイ/ポリスについては、ゲルハルト・エーストライヒ『近代国家の覚醒』創文社、1993 年、「ヨーロッパ絶対主義の構造に関する諸問題」成瀬治編『伝統社会と近代国家』岩波書店、1982 年、233-258 頁、白水浩信『ポリスとしての教育』東京大学出版会、2004 年などを参照している。

[2] Екатерина II. Мысли из особой тетради. // Записки императрицы Екатерины Второй. СПб., 1907. С.647.

[3] Словарь Академии Российской. 1789-94. // Т.5. М., 2005. С.387. ロシア・アカデミー辞典は、ロシア・アカデミーから 1789 年から 1794 年にかけて全 6 巻で発行され、収録語数 43257 語のロシア最初のロシア語詳解辞典である。

[4] Тюпа В.И. Парадоксы уединенного сознания- ключ к русской классической литературе. // Парадоксы русской литературы. СПб., 2001. С.174-192.

[5] 国原吉之助『古典ラテン語辞典』大学書林、2007 年、102 頁。

[6] Лотман Ю.М. Очерки русской культуры XVIII-начала XIX века. // Из истории русской культуры. Т. IV. М., 2000. С.106.

[7] Y.M.ロートマン『ロシア貴族』桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳、筑摩書房、1997 年。

[8] Рейтблат А.И. Как Пушкин вышел в гении. М., 2001.

[9] Там же. С.7.

[10] Сапунов Б.В. Из истории русского читателя периода феодализма. // История русского читателя. Вы.4. Л., 1982.

[11] Севастьянов А.Н. Рост образованной аудитории как фактор развития книжного и журнального дела в России (1762-1800). М., 1983.

[12] Самарин А.Ю. Читатель в России во второй половине XVIII века. М., 2000.
[13] Штранге М.М. Русское общество и французская революция 1789-1794 гг. М., 1956.
[14] Штранге М.М. Демократическая интеллигенция России в XVIII веке. М., 1965.
[15] Пыпинъ А.Н. Русское масонство XVIII и первая четверть XIX в. редакция и примечания Г.В. Вернадского. Петроградъ. 1916.
[16] Вернадский Г.В. Русское масонство в царствование Екатерины II. СПб., 1917. // 1999.
[17] Douglas Smith. Freemasonry and the Public in Eighteenth century Russia・Imperial Russia Indiana University Press. 1999.
[18] Берков П.Н. История русской журналистики XVIII века. М.-Л., 1952.
[19] Там же. С.544.
[20] 藤沼貴『近代ロシア文学の原点ニコライ・カラムジン研究』れんが書房新社、1997年。
[21] 前掲書、85頁。
[22] Полное собрание законов Российской империи. СПб., 1830.
[23] Сборник постановлений и распоряжений по цензуре с 1720 по 1862 год. СПб., 1862.
[24] Русская журналистика в документах: История надзора. Под ред. Б.И.Есина, Я.Н.Засурского. М., 2003.
[25] Баренбаум И.Е. История книги. М., 1984., Книга: исследования и материалы. М., 1959.
[26] Западов В.А. Краткий очерк истории русской цензуры 60-90-х годов XVIII века. // Русская литература и общественно-политическая борьба XVII-XIX веков. Л., 1971. С.94-135.
[27] Там же. С.94.
[28] Скабичевский А.М. Очерки истории русской цензуры. 1700-1863. СПб., 1892.
[29] Энгельгардт Н. Очерк истории русской цензуры в связи с развитием печати 1703-1903. СПб., 1904.
[30] Котович А. Духовная цензура в России 1794-1855. СПб., 1909. С.182.
[31] Шамрай Д.Д. К истории цензурного режима Екатерины II. // XVIII век. Сб.3. М.-Л., 1958. С.187-206.
[32] Семенников В.П. К истории цензуры в Екатерининскую эпоху. // Русский библиофил. 1913. №1. С.52-71.
[33] Шамрай Д.Д. Цензурный надзор над типографией сухопутного шляхетного кадетского корпуса. // XVIII век. Сб.2. М.-Л., 1940. С.294-329.
[34] Шамрай Д.Д. и П.Н.Берков. К цензурной истории «Трудолюбивой пчелы» А.П. Сумарокова. // XVIII век. Сб.5. М.-Л., 1962. С.400-406.
[35] Тюличев Д.В. Цензура изданий Академии наук в XVIII в. // Сборник статей и материалов библиотеки АН СССР по книговедению. Л., 1970.
[36] Marker G. Publishing, Printing and the Origins of Intellectual Life in Russia. 1700-1800. Princeton University Press. 1985. P.212-32.
[37] Жирков Г.В. История цензуры в России XIX-XX вв. М., 2001.
[38] Космолинская Г.А. Цензура в Московском университете XVIII века. // Eighteenth-Century Russia: Society, Culture, Economy. Wittenberg. 2004. С.139-155.
[39] Цапина О.А. Войны за Просвещение? Московский университет и духовная цензура в конце 50-х-начале 70-х гг. XVIII в. // Eighteenth-Century Russia: Society, Culture, Economy. Wittenberg. 2004. С.157-171.
[40] Silke Brohm. Театр и цензура во второй половине XVIII века. // Eighteenth-Century Russia: Society, Culture, Economy. Wittenberg. 2004. С.131-137.
[41] Век Просвещения. Вып.2. Цензура и статус печатного слова во Франции и России эпохи Просвещения. М., 2009.
[42] Самарин А.Ю. Развитие книгопечатания и цензура в России (1750-х начала1780-х годов). // Век Просвещения. Вып.2. М., 2009. С.121-152.
[43] Сомов В.А. Французская книга в русской цензуре конца XVIII века. // Век Просвещения. Вып.2. М., 2009. С.153-191.
[44] Marker. Op. cit. P.221.
[45] マーク・スローニム『ロシア文学史』池田健太郎訳、新潮社、1976年、52頁。
[46] РГАДА.(Российский государственный архив древних актов) Ф.17. «Наука, литература, искусство». Д.90. Представление об учреждении строгой цензуры в России. Л.2-7., РГАДА. Ф.7. Д.3067. Дело о книгопродавце Гарткнохе, привезенном из Риги за выписку революционного альманаха. Л.4.. 7-9. 19., РГАДА. Ф7. Д.2865. «Преображенский приказ, Тайная канцелярия и Тайная экспедиция». Л.1-3. 11-12., РГАДА. Ф.16. Внутреннее сношение. Д.582. Донощения московского генерал-губернатора князя А.А.Прозоровского императрице Екатерине II. Л.123. 128-129. 133. 134-136., РГАДА. Ф.7. Д.2797. О запрещенных книгах, картах, картинах. Л.4-5. 6. 7-7об. 9-10. 11-12. 18. 18об. 20. 22. 27-27об. 34. 37-38.
[47] Цензура иностранных книг в Российской Империи и Советском Союзе. Каталог выставки. М., 1993.